

Chapter 7

1 聖なるレクイエム

「イユノ様、何と言うことを！」
ユレヒトが叫んだ。

「むろん、冗談だ。しかし、ある意味、ある程度、ふうむ、納得は……
まあ、蓋然的には……した」

彼女はもの思いに耽った。なぜかふと心を過よぎったのである。飛ぶ鳥の影が日を翳すように。思い出す。過去、まだ内省的な少女であった時代を。気持ちを表わす行動ができず、呪縛されていた時代、人の気持ちを疵つけることができず、また主張の強い子にも逆らえず、萎縮して黙っていた時代、動揺しやすく、行動を怖れ、思いも告げられなかった時代のことを。いまはまったく変わってしまった。神と諍うほどに不遜な存在になってしまったが、しかし結局は何も変わらないのだ、……人生を振り返り、様々に思いが廻り、感慨に耽っていた。

それはそういう体験をした人にしかわからない、遙かな遠くを見るかのような、それでいて切なく懐かしい、自由で、広やか清爽で、崇高な感情だった。

彼女の不可思議な、古代寺院にある石彫りのサンスクリット文字のような沈黙の終末が来るまで待つことができないユレヒトは、

「どういことですか」
と驚愕の面持ちで尋ね、繊細な眉を歪める。

「どうもこうも」
イユノの返事は曖昧だったが、彼女自身もどう言ったらよいのかわからなかったのだ。

枢機卿イヴィルもまた怪訝な顔をしたが、日頃の冷静さは崩さず冷静に、

「そうですか。」

いや、こちらの状況を言うばかりで、イユノ・アスラ、あなた方の状況をお伺いすることを失念しておりました。あまりに急激な情勢の変化が世界で起こったものですからね」

そう言いながらも世界の動揺に動じている様子はない。

「いや、いいよ。こっちの方は大袈裟なことはない」

「そんなことないよ、イユノ、びっくり仰天のことじゃない！」

「いったい、どうされたのですか、イユノ・アスラ、アカネ・イシユタル」

アカネが説明し、イユノが補足した。

「なるほど。」

しかしある程度想定範囲内ではありましたね」

イヴィルはそう言うが、茸柳は渋い顔だった。

「いや、僕は吃驚だ。シノブのことは衝撃的だよ」

「だが辻褄は合っている。むしろそれが気に喰わないんだがな」

布羅咒若がそう言った。

「そうね。わたしも腑に落ちないのよ。腑に落ちないってことは、この期に及んでも、まだこのわたし自身がわたしにまつわる世界的なこの事件の全貌を知らない、ってことじゃない。さすがにおかしいでしょ。」

だいたいわたしの目覚めを援けるために、高天原に攻めろと依頼したっていうのは変じゃない？ 全能なるアスラの目覚めに援けが必要なのか、なぜそんな依頼をする必要があったのか。必要もないのに、ただただ自然（フュシス *phos*）の気まぐれからなのか。

それに、アスラが援けを必要とするなんて、眉唾っぽい話をなぜ彼らは真に受けたのか」

ユレヒトも頷き、

「僕も不合理かと……そう思います」

アカネも同調、

「うーん……そうよね。何か見落としていることがあるような気がするの、は確かよね……」

「だとすれば、僕らはヤマトに騙されているってことですか」

イユノが腕を組む。

「それもあり得るわね。うーん。でも、そうかなあ。って言うか、もう一つ、わたしの仕組みだ毘があるような気がする」

「まさに自分との戦いですな」

イヴイルが皮肉な微笑をしながら言う。

「当然だね。この世界にはわたししか存在しないから」

「御意」

イユノは幽玄な面持ちで、

「わたしはわたしを知ればいいのだ。それですべてがわかる。わたしはわたしを解けばいい。それで一切が解明する。わたしは本当のわたしに戻ればいい。森羅万象がわたしに還るのだから知らぬということがない。謎自らによってこの謎は解けるはずだ。ただ」

「ただ？」

「森羅万象となったとき、その無際限な智慧は我々がいま考えるような理睿考概了解意識ではない。それはもはや理解とは言えない代物になってしまっているかもしれない。

つまりは方向性のない全方向、リアリティになるのだ」

「御意」

「さあ、それより王家と和解せねばならない」

「突然の叛逆軍放棄ですか」

「あははは。そうとも言える。ともかく眞神国は独立した。正統な帝皇に帝皇となってもらおうではないか。その報告もせねばならない」

「御意。ただし茨の道ですが」

「そのとおり。世界戦争に勝たなければならない。だがそれはわたしに任せてもらおう。一日ですべてを片づけよう」

東京の城に守衛部隊を残し、眞神村へ赴く。眞神山の彝之家へ。屋敷では彝之へ裂が対応した。イユノは平伏する。

「東京の修羅城を譲ります。大政を奉還いたします」

「おまえの国だ。おまえが好きにするがいい」

「では受けていただきとうございます」

「わかった」

「では彝之家に於かれましては直ちに世界の帝皇に、神彝亞咽厨御にあつては世界最高主宰神となつていただきます。そして世界に跨る異教の神々へは、さあ、盛大なるレクイエムを」

高らかな哄笑とともにイユノは直ちに飛んだ。黄海で中国軍を撃破し、深く中原に入り裂き突き込み、崑崙山を超えて西域、チベツト及びインドを凌駕し、露西亜を占拠、東欧西欧を進撃し、大西洋を渡つて米国を縦横に翔り、龍巻のように荒らして太平洋へ飛び出し、再び南米を涉つて阿弗利加に着き、世界を征服し尽くして、全世界の神と人と森羅万象とを従え、アレクサンドリアに聖の聖なる神王都を築き上げた。

その首都は東西南北に一千キロ、彝之家を祀る王城は東西南北に百キロ、中央に成層圏を超える尖塔を持つ超巨大城で、四隅にも雲を突き抜ける塔を建てた。

「究竟眞實奥義聖神皇城」

イユノは恭しくゞ裂に言つた。

「この真理の宝玉を惶れ惶れ畏み畏み御奉ります。聖なる正統なる王者である彝之家と三千世界宇宙の大原理大真理大眞義大奥義である神彝亞咽厨御とに」

そして自らは大世界軍の総帥の紫摩黄金の坐に鎮座する。イユノは自らの謎と叛逆者の搜索のため、新たに配下となつた物怪妖精神靈魍魎魔神悪魔神々をも含めて不可説不可説転(古代インドの数詞。10^{7×2122}を意味する)のうちから選りすぐつた九九九那由多の神靈・鬼神・人間から成る密偵を放ち、太陽系内の一切を入念に調査させた。そして遂に手がかりがつかめる。

「発端がわかりました」

「どこだ、場所は」

「クレタ島。眞神の歴史で言えば養之国です。すなわちミノス王国。クノッソス宮殿からさほど遠くない場所を特定いたしました」

「そうか。証拠は」

「発掘の結果、彝之家の紋が出ました。さらにはタブレットが」

「おお、何と」

「しかも彝之家保存の粘土板と合致しました」

「奇跡だな」

「そればかりではありません」

「何だ、早く言え」

「予想さえしていなかったことですが、アンシャル家と彝之家の交わした誓約のパピルスが入った壺が見つかったのです」

「おお、信じられない。そんな莫迦な。いくら何でもでき過ぎでは。

まさかこのアスラを欺こうとするのではあるまいな」

「滅相もない。いったい、そのようなことが可能な存在があり得ましようか。いいえ、あり得ません」

「わかっている。いや、わたしはまだ真にはわかっていない。還り切っていない。甦っていないのだ。それも時間の問題だが……」

「さ、話を進めましょう。いまから五千五百年前（紀元前三千五百年）、彝之家の聖なる哲学の徳に心服し、アンシャル家は臣下の礼を取り、彝髡羅婁神は神彝亞昶厨御と相見えまみました。そして約定が交わされたのです」

「それが、アスラが隠れる、永い眠りに就くという約定か」

「いいえ」

「何だと」

「彝亞昶厨御は独神で存在しない神です。森羅万象たる彝髡羅婁も同じです。二柱の最高神は矛盾しないのです」

「それはわかる。そもそも矛盾などという概念は人間的なあまりに人間的な、死んだ羊の皮のようなもの、狭小卑小な、骸のようなものに過ぎないのだ。意味という唐突な、無意味な存在に過ぎないのだ。

さあ、それはいい。もう何度も言い飽きた」

「約定の内容はこうです。

彝亞昶厨御は五百年後に隠れ、禅譲し、彝髡羅婁は森羅万象とし

て五千年間統治し、五千年後に隠れる。隠れて後、眞神国は統治神を持たない。あたかも檜原神社や飛瀧神社のような在り方です。しかしまたそれは古今何も起こらないことを意味します」

「何と！ ああ、何と言うことだ！ 逆だったということか、我々の解釈は。ああ、しかしそうであったとしても、何ら不思議はない。

そもそも超越的だから。矛盾がない。隕石や海流や華散る櫻に何のためにおまえはそんなことをするかと問うても答えは返ってこない」

「そもそも統治の交替が無意味なのです。すべては夢、水面の月、水泡です」

「わかった、わかった、それだけか」

「いいえ、まだあります。二柱の神は誓約の立会者にある者を選び、その褒美として彼に大きな特権を与えました」

「彼とは？ 男性か」

「何と申しましょう。悪魔です」

「悪魔だと？」

「バズズが紹介した悪魔です」

「バズズ？ ああ、わたしがアスラに目覚めるときに案内をした魔神だ」

「そうです。古代アツカドの風と熱風の悪霊です。魔神です。ライオンの頭と腕、鷲の脚、背中に四枚の鳥の翼と蠍の尾と蛇の男根を隠し持つ悪霊の王です」

「で、魔神が紹介した者とは」

「デビル・アスタロテと称する若い悪魔です」

「聞いたこともない」

「無名ですから」

「それで、それは何か問題なのか」

「むろんです。悪魔ですから。悪意を爲したのです。

彼は仲介者を介して高天原で謁見し、立会者と言う特別の威厳を翳して高天原に嘘の密告をし、アスラが完全に甦り切らないうちに攻撃することを進言したのです」

「どのような嘘か」

「アスラがヤマトを斃すと言ったのです。だからアスラが自分を攻めろと言ったのだ、と。すなわちそれを口実に戦争を起こしてヤマトを滅ぼし、いずれ世界を征服するつもりなんだと密告したのです。そうでなければ全能なるアスラが目覚めのために攻めろとはおかしいではないか、と言えば多くの者は納得するでしょう」

「なるほどな。それで騙されたのか、高天原は。もっとよく考えればヤマトと戦争する口実づくりなど全能者が必要とするはずもないと気づくべきだったと思うがな。」

で、アスタロテとその仲介者の居場所はわかっているのか」

「アスタロテは見つかっていません。しかし仲介者はわかりました」
「誰だ。すぐに連れて来い。恐らくは眞神の裏切り者であろう。まさか」

「いいえ、シノブではありません。しかし、シノブは協力者でした」
「それで納得だ。どうも大日靈貴神の話だけでは腑に落ちない感触があると思った。……で？ 誰だ？」

「飛鳥タロト。すでに連行して参りました」

「おお、白髪あの少年か。よくやった。すぐに連れて来い」
普段は冷たい表情を崩さずに不敵な笑みを浮かべるタロトなのが、いまは心底から震えていた。よもや嘘を言う余裕はない。

「どうかお赦しを！」

「もうよい。ただし、シノブの隠れ場所を言え。そうすれば赦す」
「本当ですか。有り難き幸せです。生涯平伏いたします」

「よいよい、しかしどうやってアスタロトはおまえを知ったのだ」
「紹介者がいました。彝之娑斗獅です」

娑斗獅か……やはりすべては企みだったのだ。イユノはしかし既に動じるような存在ではなくなっていた。

「しかしアスラ様、娑斗獅は数年前に頼まれたと言っていました」
「ほう、数年前。最近と言えば最近だ。中途半端な。で、誰にだ？」
「娑斗獅への依頼のお手紙を持って参りました。アスラ様へ命乞い

のときに使えるであろうと言って、娑斗獅がわたくしに渡してくれたのです」

「見せるが謙い」

巻いて黄金を編んだりボンで留めたパピルス紙だった。そこには具体的な指示の内容が詳細に記され、それは見紛うことのない、ユノの筆跡であった。レターヘッドには平衛家の紋が燦々と光る。

Aaaaaahaaa.....

気持ち (いイ) ...

「わたし」は 生まれた……

生きるって こういうこと だった……のね……

こんなに……あざやか で…… *vivid*……な……こと だった……

なん……て。 ああ、知らなかった。

やバイよ。 *Ahaaa*……

存在って、やばい。『いま』ってコト。凄い。

すごいリアルだ……

Epilogue

それは何の前触れもなかった。以前と何らも変わらなかった。いつもどおりであった。

「イユノ・アスラ様、どちらへ」

ユレヒトはいきなり背を向けた彼女に尋ねる。

「わたしはいま完全に目覚めた。すべてがわかった」

その言葉を聞いて枢機卿イヴイルは少し顔をこわばらせたが、

「本当ですか？　しかしどちらへ」

振り向かぬアスラ、

「知れたことよ。シノブを殺しに行く」

茸柳も、

「まだタロットから居場所を聞き出していない」

「ふ。」

わたしは目覚めた。知っている。完全にね。わたしはすべてを既に知っている」

ユレヒトは膝を突き、

「ならばなおさら。イユノ・アスラ様の命令でシノブは一連の事件を起こしたのではなかったのですか」

傲然と振り返るイユノ・アスラII彝髡羅婁は、

「そうだ。だから殺す。理不尽だ。だが雨が病人や怪我人や老人に手加減して降るか？　立派な乗物や使用人を持つ金持ちに強く降って、傘もない貧乏人にはやさしく降るか？　迫る火の手はからだの不自由な人の前で止まるか？　イナゴの群れは貧しい農家に慈悲を垂れるか？　不幸に打ちひしがれた者にも容赦なく火山は噴火し、火砕流は襲う。堤防は敗れ、土石流が暴れ、土砂が崩れる。旱魃は照りつけ、疫病は蝕む。そして太陽は植物を成育し、愛めぐみの雨が穀物を実らせ、獣は飢えと喉を潤し、獅子はその草食動物を遠慮なく

喰らう。

ふふ。

わたしは完全に目覚めたのだ。そう言っただろ？ わたしは直に失せ消える。わたしは森羅万象だから。わたしは「存在」^{くである}なのだ。現存在の限界ある実存的見地から見れば、それはかたちある又はかたちなき認識だ。或いは意識されないこと又は意識だ。誰も知るがゆえに誰にも知覚することができない。死ぬようなものさ。さらば、イユノ・アスラII葬髣羅婁つてことね。ふふ」

茸柳は彼女が消えてから小さな碑を建てた。

イユノの生まれ育った龍吞村の赤煉瓦の洋館から少し登った丘の上であった。人家を見下ろし、風に吹かれている。

碑文にはこう綴り彫られていた。

『

もしわたしたちが死に斃れても 山が聳えるように

すべての人が潰れても 海が波頭を白く輝かせ 轟くように

海が乾き 大地が裂け 蒼穹が再び甦らぬとしても

地球が砕け 太陽が燃え尽き爆ぜようとも

銀河の永遠の星のように

あなたは数億年も 数兆年も ガンジス川の砂の数よりも多く

永劫の歲月 存在として 者どもを見下ろし 見守り

包み込み 支え 表出し 存在たらしめる

睿らかに高らかに誇らかに言おう

それは愛である と

』